



平成 24 年 9 月 7 日 第 2 卷(第 22 号)

発行： 東京都新宿区住吉町 8-20 四谷チンゴビル 2F

災害対策本部 TEL (03)3351-5038

FAX (03)5366-1058

mail:dsstsw@jaswhs.or.jp

●●●目次

- 1.災害対策本部からのお知らせ
- 2.特別投稿 ～2年目の夏を経て～
(元石巻現地責任者 武山ゆかり 氏)
- 3.現地支援活動報告
- 4.現地感想文
- 5.事務所感想文



上毛カルタ：(あ)さま(浅間)のいたづら 鬼の押出し

(群馬県吾妻郡嬭恋村)

災害対策本部からのお知らせ ●●●

【1.協力員募集】

●●●現地

現地の業務状況を鑑み、当面は制限なく受入を行います。

中 3 日以上・なるべく平日の活動が理想的ですが、具体的な日程については、災害対策本部までお気軽にご相談ください。

***9 月もまだまだ空いております。ご都合の付く方、ご協力をお願いいたします！

●●●事務所

引き続き募集しております。

平日のみの活動ですが 1～2 ヶ月に 1 回でも構いません。ご協力をお願い致します。

【2.災害対策本部会議】

次回は 9 月 7 日(金) 19:00～協会事務所にて開催します。

【3.書籍販売】

『東日本大震災医療ソーシャルワーカーの支援のバトン 1』
の販売を行っています。

発災から昨年 9 月 30 日までの石巻・仙台・大槌町・事務所・災害対策本部の活動の記録をまとめました。ぜひご覧ください。尚、売上金の全額を皆様からの寄付として、本活動の資金に充てさせていただきます。

※ご注文は注文用紙で承ります。



●●●注文用紙はホームページからダウンロードできます。

http://www.jaswhs.or.jp/date/publishing_detail.php?@DB_ID@=45

【4.facebook】



facebook でも情報をお伝えしています。現地や災害対策本部の日々の様子をお伝えしています。応援よろしくお願いたします。

●●●URL

<http://ja-jp.facebook.com/pages/公社日本医療社会福祉協会-災害対策本部/156327867812970>

【5.YouTube】

現地での災害支援活動の様子を前事務所担当の一原さんが VTR にまとめて下さいました。YouTube にアップしましたので、是非ご覧ください。「医療ソーシャルワーカー災害支援」で検索すると見つかります。



●●●URL

<http://www.youtube.com/watch?v=vn34I9h5rJ4&feature=youtu.be>

【6.現地・事務所職員募集】

災害対策本部では現地・事務所職員を随時募集しています。
災害支援に関心のある方からのご応募をお待ちしております。
または周りでご興味のある方がいらっしゃいましたら、是非ご紹介ください。



上毛カルタ：㊦んぶく（分福）茶釜の茂林寺
（群馬県館林市 茂林寺）

●●●①現地常駐者(短期契約職員)

- ・就業場所：宮城県石巻市大街道北
- ・就業時間：9～17時
※業務の関係で残業あり。
- ・休日：土曜・日曜・祝日・年末年始
- ・基本給 250,000 円/月
- ・通勤費実費支給
- ・社会保険加入
- ・医療ソーシャルワーカー業務経験必須
- ・長期の方優遇。月単位でも応相談。

●●●②災害対策本部事務所担当(パート職員)

- ・就業場所：協会事務局内
- ・就業時間：週3日程度 10～17時
※業務の関係で残業あり。
※頻度・時間は応相談。
- ・休日：土曜・日曜・祝日・年末年始
- ・時給 900 円～ 通勤費は実費支給
- ・経験不問。医療ソーシャルワーカー業務経験者優遇

ご応募の方は下記宛に履歴書をお送りください。面接にて決定させていただきます。
または災害対策本部までお気軽にお問い合わせください。

●●●お問い合わせ

住所：〒162-0065 東京都新宿区住吉町 8-20 四谷チンゴビル
電話：03-5366-1057
担当：笹岡・中川

●●●特別投稿

元石巻現地責任者である武山ゆかり様より、大震災発生から2度目の夏を迎え、現在の思いについてご投稿いただきました。

2年目の夏を経て

元石巻拠点担当 武山ゆかり

今年は、旧盆を過ぎても、まだまだ暑い。北の避暑地と呼ばれ、例年なら秋風の立つ宮城県石巻市でも、日中は刺すような陽射しが少し傾く頃、東京へ帰る高速バスに乗り込んだ。10ヶ月に及ぶ被災地支援中心の生活を、とりあえず終え、後任3人のMSWに託した支援活動はまだ多くの人手を必要としている。これからは、ボランティア(協力員)として通う予定でいる。とはいえ、石巻で暮らした中で、たくさんの方が、復興が果たせるまで一緒に力を貸してほしいと、実は胸の中で思っていることも、ひしと感じている。

未曾有の被害に

これまでに国内の各地で起こった災害の何処よりも、広い地域で、産業を根こそぎと云っていい程、破壊され、何万もの家屋を壊され、たくさんの肉親を亡くした方々の痛みは、まだ容易には癒えない。まだ、瓦礫の処分先も決まらず、復興の目途さえ立っていない。やっと再建した漁港や、魚の加工場にも、あの津波のすさまじさや、流された肉親を思い出し、足を向けることが出来ない、海辺で働く気になれない、という声も少なからず聞く。全滅した浜から、仕事を求めて市内の仮設に入居したが、やはり、雄勝や牡鹿の浜の仕事に戻りたい人も、医療機関が流されたため、やむなく通院の可能な地域の仮設に、家族と別れて入った高齢者も、悔しさや寂しさをこらえて毎日を送っている。狭い、不便な仮設住宅での暮らしは、お互い大変なのが分かっただけでも、隣近所との付き合いや、支援の分配や広報の配布などにもストレスを感じる。間に入り、ねぎらい合う言葉をつなぐ人や機会も必要だ。こうした方々を見捨てては行けないと、多くのボランティアが感じ、いまだに、被災地にとどまり浜の仕事を手伝い、支援に飛び回る若者もいる。私とて思いは同じだ。

被災者自身が動き出すには

阪神・淡路大震災を当事者として、街の復興に力を尽くした室崎益輝氏(日本災害復興学会会長)は、被災者自身が元気になって考える力を持ち、かつしっかり議論する場が出来るのを待つことが長期的展望を描くには必要だと言っている。震災直後、新盆の後、1周年、そしてこの夏を迎え、被災された方から、「その日の事」が語られることが確実に減ってきている。またMSWの励ましに「いつまでも前の仕事の事を言っても…」と慣れない分野の求人にも目を向け始めた人も出てきている。また、やっと出始めた行政の復興計画にも、現実と添わない内容を批判追及することから、力を出し始めた方もいる。

被災をしなかった内陸部に、早々に資本投資をして、流された家財や衣服を家電を流通に乗せた全国チェーンの量販店は街の人の流れを変えた。車を持たない人も近所の小売店や飲食店

の再開を待てず、バスにのり、車を買ってショッピングモールにお金を落とす。街の流れも、お金の流れも震災により変わったまま、復興に結びつきにくい形で、固定化されようとしている。これではいけないと焦っている旧商店街や小売業の店主、開業医や薬局までもが、今では再開の意欲を失って来ている。シャッター通りとなった旧市街地は、今はボランティアや復興支援で訪ねてくる外からの客に、やっと支えられている。活気ある街にするには、地元の住民と一緒にあって、再建のために働く、外からの元気な支援が必須であろう。

厳しい時期に

被災住宅の修理、解体撤去など公的助成の期限も迫り、次への選択を迫られている被災者も少なくない。延長された失業保険給付も終わり給付を受けた弔慰金、義援金も残り少なくなってきた。乗り越えた冬は、緊急支援や震災直後に被災地に入った献身的なボランティアが、こまめに歩き、物資を届けた。学生や若者が元の生活に戻った今、次の冬に向けた、新たな支援のかたちが、顔の見えるネットワークを作っている。これまで、都市のホームレスや失業者を支援してきた経験を持つ支援団体などで、ここ数年私たち東京のMSWも年末相談会や越冬支援で協働している団体などだ。こうした支援に、生活に詰まった方達を繋いだり、共に支えたり、生活保護につなげたりする必要が予想される。また、仮設居住者の見守り隊として、雇用された社会福祉協議会の支援専門員は、震災前は福祉関連や援助職以外の、主婦や商店主だったりした方達だが、住民に寄りそい、とてもよい仕事をしている。毎月開かれる、各エリアでの、保健師、看護師、包括ケアマネ、心理やリハ職、MSWなどの専門職と個々のケースへの対処を語り合う中で少しずつ、でも着実に、人を支援する力をつけてきている。仮設住宅住民が復興住宅に移り、包括支援センターに支援が引き継がれた後、この支援員だった方々が広く地域に散らばり、コミュニティを支え、発展させる担い手になって活躍できるよう、今、地域への視点や、福祉の知識やこころ、人に添う技術を磨くことを支援し、かつ行政がしかるべきポストや位置づけを行うべきであろうと市へも進言してきた。生活困窮者の発見や支援にも、民生委員と組んで力を発揮してくれるだろう。

勿論、生活困窮者が増えて行くのを、漫然と受け止め嘆いてばかりはいられない。これまでも、多くのボランティア組織と手を携え、力や若さや専門性を出し合って、住民の力を引き出す工夫や働きかけに努めて来た。仮設の「手作り箸」の販売やファッションモデルガイやプロメイク、カメラマンと協働し「ヤング・フリマ」を開催したり、高校生カフェの支援を続けたりと多彩だ。もっと人手があれば、北上や雄勝、牡鹿の浜での支援も待たれている。現地を見て、生活を知り、初めて支援の内容が見えてくることも沢山経験し、そこからがまさしく復興への支援となる。

続く仮設住宅での暮らしに

入居よりほぼ1年を迎える仮設住宅では、生活用品も増え、夫婦で1Kや、4人家族で2Kの、ますます狭くなっている生活空間に、閉じこもりがちの方も多い。この8月、被災3県の介護保険要介護認定を受けている人の増加率が12.7%、前年の3.7倍になっていることが報道された。震災で閉鎖されたままのデイサービスや入所施設も多く、仮設生活の長期化で体調や体力の低下から、介護予防に手が回らない中、「軽度認定者」も増えている。

仮設住宅での生活は、あくまで仮住まいなのだが、自力での住宅再建や転居はまだ少ない。「復興支援住宅」が出来、抽選に当たり入居する以外は考えられないという方も多い。それまではこの先数年近くかかる長丁場だ。その間を心身共に支えるには、様々な支援が必要だ。5月

末に開設された開成仮設診療所はこうした仮暮らしの方達をきめ細かく支える診療が展開されようとしている。まだ8月時点ではMSWを募集中だが、この地に根を下ろし、被災者を長く支えるソーシャルワークが待たれている。これまで、仮設居住者に関わってきた、市立病院看護師、社協見守り支援員や地域の病院や包括のスタッフをはじめ、私たちMSWが、今後毎月事例検討や協議の機会を持ち、どのような支援や取組が必要かを検討し合う場を設定し、職員を支えていく予定だ。地域医療に意欲を燃やす診療所長も、私たちの参加や支援、協働を期待している。

支援のバトンを繋ぐには

2016年に市役所に隣接した駅前に新たな市立病院の開設が予定されている。市の担当者にも再三話しているが、ここに複数のMSWが配置され、石巻市民に責任を持つソーシャルワークの展開が開始されるまで、私たちはこの地での支援のバトンをつないでいきたい。全国のSWの支援の声と、1人あたり年数日の出張支援、私的休暇を利用した支援や、家族での旅行支援などがそれを可能にするだろう。

今は故郷のように感じられる石巻は、緑の山河に囲まれ、美味しい米処と新鮮な海の幸にあふれ、生活や経済も豊かだった故か、心やさしい人々が多い。これから、多くの人々の支援により、より一層、美しくなる街でもある。

大きな喪失から立ち直り、生き直すには、1人ひとりに添う支援が必要であり、私たちはその力と技術を持っている。力を貸してほしい。
(2012.8.29 記)



群馬県吾妻郡嬭恋村 キャベツ畑

●●●現地支援活動報告

活動期間:2012年8月9日~8月11日
安藤 麻由美 (神奈川県 三浦市立病院)

私の勤務する病院も海に囲まれ、東日本大震災発生では直接の被害を受けませんでした。地震発生直後の停電とその後の部分停電では多くの混乱があり、決して他人事とは思えず被災地での支援を模索していました。

今回、仮設住宅で生活する独居の方の介護保険申請支援、仮設サロン支援連絡会会議への参加、訪問調査の同行を行ってきました。

短期間の断片的なかかわりの中で出来ることは限られますが、話を聴き仲間とその話を振り返った時、心のケアに配慮し抑制された思いまで想像し理解することが被災者の話を聴くことで大切であると気づかされました。この気づきは日々の支援の仕方を振り返り初心を思い出す機会にもなりました。

各団体では、自立に向けた支援の仕方を模索しています。又、被災者もそれぞれの思いを抱え生活を再編しようとされています。今後、時間の経過の中で変化する支援のあり方を共に考え、出来る限りの支援を行いたいと思います。

活動期間:2012年8月16日~8月18日
富士川 浩子 (大阪府 大阪府済生会中津病院)

2.5日という短いボランティアで恐縮です。

実際に現地で活動させて頂き、被災者の方に直接接しさせて頂き、震災のもたらした生活問題の根深さや、一般の市民生活への影響の大きさを見せつけられました。阪神大震災でも指摘されていたように、被災者の中での生活再建の格差が、震災の月日が経過する中で大きくなっていくと思われまます。多問題を抱え、生活再建が困難な課題を抱えられている被災者が、支援対象者として取り残されていくと思います。

私がボランティアに参加したのは、震災後1年4か月を経過してからです。震災直後に被災地に支援活動で現地入れされた日本協会の幹部、MSWの皆様には頭の下がる思いでした。支援の枠組みや復興協議会の仕組みが整備された中での今回のボランティア活動、私としては十分趣旨を理解して対応できたか、現地スタッフの皆様にご迷惑をかけたか少し心残りです。

よく“よりそう”と言いますが、協議会の目指す側面的支援と、地域へ引き渡すタイミングや地域育成・再生など多くの視点を学ばせて頂きました。ありがとうございました。普段、なかなか実践できない社会活動を行える機会となりSWの意義を感じる活動でした。

活動期間 2012年 8月 16日～8月 18日
広部 麻由子(大阪府 大阪府済生会吹田病院)

初めて被災地に行かせて頂きました。これまで津波の影響で大きな被害を受けた街の様子を TV の報道等で見えていましたが、実際に現地に行くと多くの人の力で街が復興に向かっていることを感じる事が出来ました。3日間の活動のなかで直接、震災について現地の人と話す機会はありませんでしたが、話の折々に、震災で大事なものを、これまで当たり前としていたものを失ったということを感じさせられる場面もありました。

病院の外で SW として活動することが初めてで、戸惑うことも多かったのですが、石巻に行くことで、これまでどこか非現実であった震災を現実のものとして感じられたように思います。今後も自分にできる復興支援を続けたいと思います。

活動期間 2012年 8月 22日～8月 26日
公文 理賀(高知県 嶺北中央病院)

「私に何ができるのだろうか?」。あの震災以来ずっと考えてきたことであつた。

私は18年前、石巻に旅行に訪れたことがある。その際、宿泊した民宿のオーナーに大変お世話になった。石巻魚市場や日和山公園に連れて行ってもらった。あんなに親切に下さった人々に、私は何もできず傍観者として時間を過ごすのだろうか?

時間は経過してしまつたが、今回、石巻の町を再訪することができ、自分の足で歩くことができ民宿のオーナーにご挨拶ができ自分の中では少し心の整理ができた。これからどうするのか。実際見た現地から、今後私がMSWとして生かしていくことは、南海地震が発生したときにこの経験を生かすことだと思ふ。訪問した方々から聞かせていただいた経験談、目の当りにした石巻市民病院跡の悲惨さ…。避けられようもない災害時、混乱時に少しでも冷静に対処し、患者さんの命を守れるように、自分の住む(働く)地域のシステム構築に関与したいと痛感した。

●●●現地感想文

●●●8/30 久保木美由紀(現地担当)

今朝の地震の揺れには驚きました。

1年半前の地震、津波が起きた時の不安や驚きが少し理解できた気がします。

●●●8/31 中越 香(高知県・町立国保嶺北中央病院)

震災から1年半が経ち、街並みを拝見したり石巻の方とお話をしていると皆さんの復興の力を強く感じました。「支援のバトン」という形で参加させていただきましたが、力強く復興の道をたどっている傍らで、自身の生活の困窮さ、無力感、焦り等に悩み苦しんでいる方に対し、今後長期的にケアしていく必要性和難しさを痛感し、短期的な係わりでは何にもならないのではと感じました。私自身としてはとても貴重な経験をさせて頂き、SWとしてだけでなく、一人の生活人として考えていきたいと思いました。

現地スタッフの方々には大変お世話になりました。ちょっとした息継ぎになればよかったかと思いますが・・・ありがとうございました。

●●●9/1 久保木美由紀(現地担当)

昨夜のフィリピン沖の地震の影響で、広範囲の日本沿岸に津波注意報がでました。

幸い午前12時に注意報は解除されましたが、おとといの地震や昨夜の津波注意報で、1年半前の住民の方が感じられたことがリアルに感じられました。

先日より、緊急フォローケースや自立サポートに振り分けられるケースが増えています。

拒否・心配ケース等、介入方法を慎重に検討しなければいけないケースも増えています。

●●●事務所感想文

残暑は続いておりますが、秋の気配も少しづつ感じます。

これからの東北も、涼しさから肌寒さに向かっていくと思います。

現地で活動されている方々、体調管理をしっかりとられ、頑張ってください。

8/29 群馬県・独立行政法人国立病院機構西群馬病院 尾方 仁